

第三節 その他の療法

薬草やマジナイ以外の治療法で、物理的なものや迷信と思われるもの、危険を伴うと思われるものもあるが、往年使用されていたといわれるのを述べることにする。

- 1 子供のハシカや^{ほつち}疱瘡などの流行病の場合には世之主神社裏の祠堂にお参りすると治るといわれる。
- 2 病人の枕元に刃物を外向きにして置き、厄病よけにした。
- 3 熱さまし、のぼせ下げにはミミズを煎服。豚の頭肉とサンキライの煮汁。アバシ（針千本）とウイキョの煮汁などを飲むとよい。
- 4 視力の弱い人、夜盲症には川ウナギの生肝。
- 5 ミーチンケ（ものもらい）は首根から十センチぐら以下の背筋にニギビのようなものができるが、それをつぶして^{うみ}膿を出す^{とよい}。
- 6 ミーガサ（目の病気）肩こう骨からその根を掘り出して切り取るとよい。
- 7 鼻血が出たとき、後頭の髪を一〜二本抜き取り上を向く。また、上を向いて後頭部を手刀で叩くと止まる。しかし、この場合血がのどに流れ込む危険性がある。
- 8 ヌジヤギ（魚の骨などがのどにひっかかること）煮た芋か、ご飯を^の呑み下す。また湯飲みに箸を^は十文字に渡し、その間から水を飲むと取れる。擻り^{うす}臼の溝に残っている粉を湯飲みに入れ、水に溶かし、それにホーと息を吹きかけてから飲ませるとよい。
- 9 切り傷、^す擦り傷にははえ取りくもの巣をはりつける。百足を種子油につけて置いたものを塗布する。指の場合にはしやぶると血が止まる。
- 10 マミ（肉刺）履物ずれや荒仕事の後で手足にできる豆粒大の水ぶくれ、また、刺を^しさし化膿^{かのう}した場合には糸に墨汁をつけて針で患部を通すと、水^{すい}分^{ぶん}膿^{うみ}が出て、中が黒くなり数日後に治る。
- 11 テーシヤ（そら腕）^{てしや}手首が痛むことで、黒糸で手首をしぼる。
- 12 クチビ（手足にできる豆粒大の固いいぼ）は子供の

- 寝小便、疝かんなどと同じく灸きゆうをすえる。
- 13 できものやはれものは焼火箸ほしか、たばこ、線香などの火であぶると治りが早い。マダ(蝟黒)を腐らせておいたものは吸い出しとして用いる。
- 14 火傷やけどにはしょう油か味をつける。
- 15 破傷風は海老えびの殻を黒焼きにして砕き、酒に入れ一口飲んでから後、患部の周辺につける。
- 16 くぎを踏みつけたら、抜いた後を金錐つちで叩く。
- 17 肝臓、じん臓病にホーラヌーシ(水にな、アサリ、ハマグリ等の貝汁を飲む)。
- 18 クサフリ(ヒラリヤ)はふとんを何枚かかぶせて、上から押えたりする。
- 19 肺病に山羊やぎの生血。栄養、精力をつけるためには山羊料理。冬の寒さに耐えるため、風邪かぜをひかないために六月の山羊汁は効力があるといわれている。
- 20 ぜんそく、小児ぜんそくは猫肉の汁ウジヨグルミヤ(山猫)がよいといわれている。
- 21 冷え症、長患いの後に犬肉の汁を飲む。

科学的医療のなかった昔の治療法が、遠い祖先たちから継承されたもの、生活の知恵の中から生まれたものであり、中には「病は気から」という言葉があるとおおり、藁わらをもつかむ思いで神頼みしたことは事実であるようだ。

民間療法については、まだ聞き書きが不十分であったり、未調査の面もあり、実証したわけでもないのに、叱しと責を受ける点や識者の御教示を仰がねばならぬ点が多々あると思われる。また、こうした民間療法の中には、実際に使用したのではなく、迷信や言い伝えによるものが多く、その信頼度の疑わしいものもある。したがってその利用の場合は医師と十分相談のうえ用いること。

※ 参考資料

永吉 毅「郷土の薬用植物」 先田光演「民間療法のクチ」 甲 東哲「沖永良部島の民俗語い」 蝟島直「治癒者としてのユタ」 川畑保夫「沖縄医療の言い伝え」 主婦の友社「薬草カラー図鑑」